

組織目標評価報告書（平成25年度）

部局名：教育開発センター

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
①教育領域 ①-1 目標 該当なし(センター業務に記載) ①-2 目標とする(重要視する)客観的指標	自己評価
②研究領域 ②-1 目標 ・教育に関する各種アンケート等を本年度も継続して実施し、現状の把握に努めるとともに、アンケート結果を分析し、本学が直面する教育の課題や改善すべき事項を明らかにする。 ②-2 目標とする(重要視する)客観的指標 アンケート実施状況	自己評価 ・昨年度実施した「先行執筆された岡山大版教科書の利用状況」に関する調査結果、並びに今後実施される予定の授業内容等の標準化のために各学部・部局が取り組んでいる方策あるいは課題等についての調査結果、岡山大版教科書を使用した学生の理解度、使いやすさなどに関する調査結果と、それに対するFD委員会の提案を踏まえ、同委員会と連携しながら、教科書編纂の問題点・課題の解決に向けて検討を行った。 ・大学院学生アンケートの分析に基づき、複数(副)指導教員及び研究科間連携教育に関する現状について調査分析を行った。複数(副)指導教員制については、博士後期課程では3研究科、博士前期課程では2研究科で「教員組織・指導教員に関する規定」を整備し実施している。研究科間連携教育については、先進分野融合特別コース(自然科学研究科・環境生命科学研究科)、低線量放射線環境安全・安心工学研究教育プログラム(保健学研究科・自然科学研究科・環境生命科学研究科)を設置して全学的に展開している。これらの現状分析と今後の課題等を取りまとめた。 ・大学院学生アンケート調査の結果分析に基づいて洗い出した大学院教育の課題・問題点を取りまとめ、大学院教育構築ワーキンググループへ提言を行った。また、情報統括センターと連携して、大学院修了予定者(博士前期課程と博士後期課程)に対するアンケートを実施し、各研究科ごとに大学院教育と研究指導の満足度・学習成果・支援等について分析集計を行っている。 ・大学院教育構築ワーキンググループは、教育システム委員会が取りまとめた大学院学生アンケート調査結果に基づく分析集計(提言)を受けて、検討を行い、コースワークをコア科目群に位置づけたカリキュラム再編を各研究科に依頼し、平成26年度から実施可能なカリキュラムが策定された。 ・各研究科における英語による授業等のニーズについて調査するとともに、調査結果を踏まえて教育方法や教授内容の国際化の促進方策について議論した結果、平成26年度に英語によるコースの充実や教育方法の国際化に向けた基本方針を策定することとした。
③社会貢献(診療を含む)領域 ③-1 目標 該当なし(センター業務に記載) ③-2 目標とする(重要視する)客観的指標	自己評価
④センター業務 ④-1 目標 ・教養教育の内容や科目区分の見直し等の教養教育改革の検討を行うとともに、教養教育管理専門委員会および学習科目部会等の機能の検証と見直しについても検討する。 ・日常的にWEB掲示システムが円滑に運用できるような整備、調整作業を行い、教育開発センター等の決定事項を迅速に反映できるようにする。 ・OU-Voiceを、教養教育のみならず、専門教育も含めた本学全体における教育の新たな試みについての情報発信源として活用する。 ・標準コマ数の実施状況に関する点検評価や教養教育に関する各学部の負担の適正化を図るため、教員活動評価調査票入力システム・データベースの信頼性の更なる向上を図る。 ・岡山大版教科書出版支援事業では、学部授業科目(教養教育科目、専門教育科目)や大学院授業科目において、本学の教育事情に最適化した内容、レベルであって、学生が購入しやすい低廉な価格の岡山大版教科書の編纂を引き続き支援するとともに、授業内容の標準化のため、共通教科書の作成に努める。 ・今年度取り組んだ「大学院学生アンケート調査」の分析結果を考慮に入れたうえで、教育システムの観点から本学大学院教育の課題・問題点の改善と体制整備の具体的な取り組みを進める。 ・これまで実施してきたFD活動を継続して実施していくとともに、平成24年度に行った検証、提言に基づいた種々のシステムの改善を行う。また、本学における学士課程教育の構築に向け、FDの観点から課題について検討する。 ・ベストレクチャーの認定制度の導入を検討すると共に、附属図書館と連携して、本学におけるラーニング・コミュニティの創出等について検討する。 ・学士課程教育構築システム(Q-cum system)の本格始動を受け、教養教育科目と専門科目に対して設定している学力を、学生がどの程度獲得しているかを検証する。 ・学生による授業評価アンケートを補完し、授業の多面的な評価と改善を実現するとともに、授業に対する教員のモチベーションを向上させる方法として、教養教育科目にセルフレビューの導入を検討する。 ・学士課程教育構築システム(Q-cum system)の広報並びにブラッシュアップに努め、利便性を高めるとともに、ティップポリシーと開講科目との関連付けの見直しを行い、学習到達度評価の厳格化を図る。 ・教員活動評価の見直しの一環として、「学生による授業評価アンケート」の改善方法、特に授業評価アンケートの質問項目にDPと授業科目の関連性に関する妥当性を問う項目を加えることを検討する。 ・学習管理システムWebClassの普及と利用促進に注力すると共に、英語の自習システムALC NetAcademy2についても、言語教育センターと連携し、その普及と利用促進を図る。また、学生指導システムについても、本年度の調査結果を踏まえ、さらなる調査と検討を行う。 ・従来から実施してきた地域・社会連携、高大連携、教育連携、地域教育機関等との連携に関する活動を継続し、さらに発展させる。	自己評価 ・本学における教養教育のカリキュラムと担当教員の配置に係る問題点を探ると共に、そこで明らかになった問題点を解消すると同時に、教養教育DP要素に則った授業内容の科目を教養教育科目として、大学が組織的に提供する授業科目編成を平成27年度から実施するべく、学系部会を新たに立ち上げ、現在教養教育の有効な授業科目並びに授業担当教員を検討している。 ・日常的にWEB掲示システムが円滑に運用できるような整備、調整作業を行い、教育開発センター等の決定事項を迅速に反映できるようにする、検討を行っている。 ・OU-Voiceを、教養教育のみならず、専門教育も含めた本学全体における教育の新たな試みについての情報発信源として活用できるよう検討を行っている。 ・専任教員授業担当コマ数の実態を検証するため、教員活動評価票入力システム(岡山大学情報データベースシステム)を利用して教員の授業実施コマ数を集計し、各部局の教員1人当たりの授業担当コマ数を算出したところ、昨年度に比べ、教員の勘違いや誤解に基づく入力データミスが減少していることが明らかになった。 ・教養教育に加えて、学部専門教育科目及び大学院の授業科目を対象として、岡山大版教科書の編纂支援を目的に2回の公募(4月、9月)を行った。4月の公募においては審査の結果、2件の応募、2件を採択した。9月の公募においても、5件の応募中、4件を採択した。これら7件の申請に対してはヒアリングを開催し、「岡山大版教科書」として出版することが相応しいかどうか、経費が妥当な金額であるかどうか、経費が真に必要なものであるかどうか等について特に重点を置いて審査した。本年度採択された6件の内、1件は大学院授業科目分である。 ・学部・大学院間の連携教育の実施状況について調査を行い、現在学内で実施されている、学部・大学院間型連携科目(文学部・社会文化科学研究科)、ARTプログラム(医学部・歯学部総合研究科)、先進基礎科学特別コース(理学部・工学部・環境理工学部・農学部・自然科学研究科・環境生命科学研究科)についての履修者数、各学部・研究科の取組の現状について分析し、改善に向けての課題の検討、制度見直しについて、取りまとめ、教育開発センター運営委員会へ提言した。 4月及び12月に「新任・転入教員FD研修」を開催し、教育方法の工夫などFD全般、IT活用、メンタルヘルス問題への対応などに12月にの研修を行い、職務に必要な事柄についての周知及び理解を図った。また、9月に桃太郎フォーラムXVII「アクティブ・ラーニングの活用」を開催し、アクティブ・ラーニングが求められる背景や実践事例を踏まえ、今後の教育の在り方等について議論した。各分科会においては、アクティブ・ラーニング、学力、コースワーク、授業評価アンケート等をテーマに、本学の現状や課題を共通理解するとともに改善策等を検討した。 ・11月の大学祭において、試行的にベストレクチャーを選出した。更に、教員の教育改善に対するインセンティブを引き出すためには、ベストレクチャー制度を大学の公式の認定制度とすることが有効と考えられるため、制度化に向けての具体的な検討を開始した。また、ラーニング・コミュニティに対する学生の意見・要望を調査し、その結果を中央図書館利用者サービス実施検討WGに報告した。また、このWGには、教育開発センター委員会の委員2名が参加し、ラーニング・コミュニティにおけるICTの活用について提案を行った。 ・学士課程教育構築システム(Q-cumシステム)を利用して、1月末における全学部学生の教養教育及び専門教育における大学が設定した学力の獲得度を調べるとともに、その結果を基に教養教育科目及び専門教育科目のカリキュラム並びにカリキュラムマップの内容の見直しを進めている。特に大学が設定した5つの学力の中でも、「行動力」や「自己実現力」に関する学力の獲得度が少ないことから、これらのDPと強く関係する科目を「ティップ科目」として、学生に履修を薦めることとした。 ・昨年度までの検討結果を踏まえ、授業評価アンケートの改定案を策定すると共に、平成26年度前期からの導入を目指して準備中である。また、教育開発センター教員の協力を得て、教養教育において教員の授業風景をビデオ撮影し、そのビデオを基に当該授業担当教員が自身の授業を評価するセルフレビューを試行した。 ・4月に、学士課程教育構築システム(Q-cumシステム)の評価基準にGPの要素が含まれるよう設定を行うとともに、12月に、本学と同様にリーダーチャートを用いて学力達成度の可視化を行っている他大学(横浜国立大学、玉川大学)を視察し、意見交換を行った。また、学部・学科ごとに学年別のDPポイント平均値を算出し、学力保証点の設定に関する審議を開始した。 ・WebClassの利用講習会(9月19日受講生26名、3月7日開催予定)、ALC NetAcademy2の利用講習会(10月18日受講生4名)を開催し、各システムの全学的な利用促進を図った。本年度は、e-ラーニング開講講座が517コースに達し、学内の普及効果を確認した。また、WebClassの利用拡大に対応するため、各学部にWebClassサポートスタッフの設置を行い利用者支援体制を充実するとともに、e-ラーニングコース開講の自動化を可能とするシステムの機能拡充を進めた。 ・従来から実施している地域・社会連携、高大連携、教育連携、地域教育機関等との連携に関する活動を継続し、さらに発展させた。
④-2 目標とする(重要視する)客観的指標 ・学士課程教育構築システム(Q-cum system)の稼働状況と学生のDPポイント獲得状況 ・各種教職員研修会の実施状況と参加率 ・教養教育TA研修会の実施状況と参加率 ・e-ラーニング利用状況 ・岡山大版教科書出版件数 ・教養教育カリキュラム実施状況 ・大学間連携授業科目の履修者数、単位取得状況 ・全学公開講座実施状況と参加者数	
【総括記述欄】 平成25年度の組織目標として掲げられていた課題に関してはほぼ達成できた。来年度に向けた課題としては、教養教育改革の促進、並びに、教養教育が担うべき学力(教養DP要素)の育成を最適化したカリキュラムの構築、担当教員の適切な配置等について、学系部会を中心に検討を進めることである。また、学士課程教育構築のPDCAサイクルを回すための方策として、中教審答申に謳われているアセスメントポリシー、アセスメントテスト、ルーブリックの導入に向け検討を行いたい。	